

平成29年11月
在リヨン領事事務所
副領事 江頭 海咲

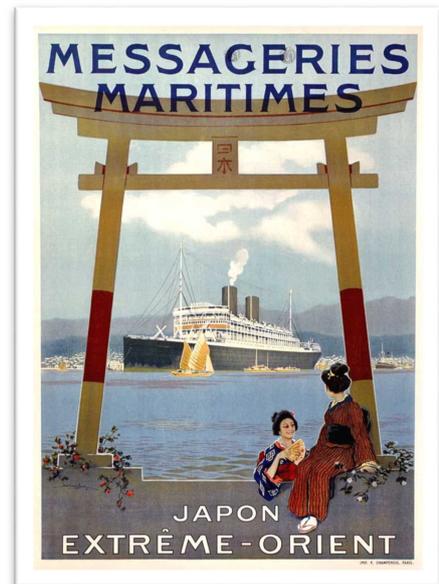
2018年は日本とフランスが外交関係を樹立してから160年を迎えます。新興国の台頭もあり、国際社会における日本のプレゼンスの相対的な低下を懸念する声も聞こえますが、フランスで生活して感じることは、同国における日本の存在感は他のアジアや中東・アフリカ諸国を質・量ともに圧倒しているということです。その大きな理由としては、両国民の美意識に共鳴する部分が多く、日本という国の表層的な部分のみならず、その底流に流れる日本人の精神性までを含めて深く理解しているという点でフランスが世界随一であること。また、多くの日本人がフランスを愛の国、パリを花の都と敬愛するように、フランス人もまた日本に並々ならぬ関心を抱き、日本を学び、そして深く愛することで、フランス人自らがフランスにおいて日本の魅力を発信する役割を担っているからに他なりません。では、日仏関係の礎となった160年前、両国はどのように出会い、そして結びついたのでしょうか。

1 日仏関係の夜明け

古くから生糸は交易材としてシルクロードを通じて中国から中東・欧州各国へ搬送されていた事実はよく知られています。16世紀、フランスでも絹の都としてリヨン市が栄え、ナポレオン3世の統治期には絹製品は第1位の輸出品目となります。しかし、1855年から蚕の病がヨーロッパで発生したために、フランスの養蚕農家は壊滅状態に陥り、絹商人は生糸の供給元を海外に求め旅に出た結果、やがて横浜に辿り着きます。時を同じくして、1858年10月9日、日仏修好通商条約が江戸で調印され、日仏の外交関係が樹立します。江戸公使館の全権公使であったレオン・ロッシュの最重要任務の1つが日本産生糸と蚕卵の調達であり、ロッシュの尽力により江戸幕府より最上級の蚕卵がフランスに送られます。その結果、フランスでは必要な繭の生産量を維持することが可能となり、同国の経済は復興を果たします。また日本にとっても生糸は最大の輸出品目となり、近代化に欠かせない設備を輸入するための外貨獲得手段となっただけではなく、フランスから大砲の納入や横須賀製鉄所の建設といった近代産業の立ち上げのための援助を得ることになりました。

現在、リヨン市を中心とするローヌ・アルプ地域は、フランス国内の合成繊維生産の65%、欧州生産高の5分の1を占める、欧州第1位の繊維産業集積地を形成しています。加工技術に優れたフランスと高性能・高機能という素材技術力が高い日本との繊維産業連携は、政府レベルの日仏産業協力へと発展し、2014年5月の日仏首脳会談で「繊維に関する協力覚書」(MOC)が締結されるまでに至りました。

横浜港からの最大の輸出品として、生糸がフランス帝国郵船により運ばれていた(1930年頃のポスター)。



©Collection Christian Polak

2 群馬県富岡市の国際的取組みへの支援

上述のとおり、フランスの織物産業や繊維産業の発展には、日本との生糸貿易や絹産業の技術交流が深く関わっていましたが、この歴史的事実はフランスでは知られていません。そこで、在リヨン領事事務所では富岡製糸場と絹産業遺産群が平成26年にユネスコ世界遺産に登録されたことに着目し、日仏交流の黎明期に絹が果たした役割、フランスの技術と日本人の心が富岡製糸場でどのように結びついたのかをフランス国民に広く伝えるために、平成27年11月に群馬県富岡市と共催で文化事業「絹が結ぶ縁」を開催しました。本事業は3つの柱からなります。

1つめの柱は、富岡市と富岡製糸場の設立指導者であったフランス人技師のポール・ブリューナの故郷であるブールドペアーージュ市との友好都市協定の締結です。世界遺産登録を契機として一気に交流を加速させ、友好都市協定を締結した例は日本全国的にも珍しいとされています。



岩井富岡市長とニエゾン・ブールドペアーージュ市長

2つめの柱は世界遺産登録1周年を記念したレセプション、絹及び繊維に係る日仏産業協力の未来についてのパネルディスカッションです。激動する国際環境の中での繊維産業の今後の展望について多角的な分析が行われ、フランス関係者からは非常に興味深い議論であったとして満足の声が聞かれました。



リヨン市庁舎での記念レセプション

3つめの柱は展示会です。第1部では日本の生糸や養蚕がフランスの絹産業の発展を支えた一方で、フランスの技術がどのように日本の近代化を支えたのかを紹介しました。第2部では、過去の歴史回顧にととまらず、近代の日仏の産業・技術協力の歩みにスポットをあて、日本化学繊維協会などの協力を得て、両国の代表的な高性能繊維製品を紹介しました。



リヨン第4区及び6区区役所での展示会



リヨン織物装飾芸術博物館での展示会

3 自治体間交流の発展のための継続的な支援

自治体間交流を一過性のイベントに終わらせないためには、行政（国と地方の連携）、民間企業及び住民が三位一体となり、その後の交流の持続的拡大や都市の活性化へ繋げるための仕組みを考えなければなりません。在リヨン領事事務所では、上記の在外公館文化事業に引き続き、平成29年度においても富岡市と協力して以下の取り組みを行いました。

(1) 双方向交流の実現（平成29年10月8日）

交流とは双方向かつ継続的な取り組みであって、人と同じで片方の憧れや思いが強い関係は長続きせず、寂しい結果に終わるのではないのでしょうか。フランスの方々にも日本の歴史遺産を直に触れてもらい、市民との心のこもった交流を実現したいという思いから、富岡市主催の日仏交流シンポジウムが開催されました。私も外交的な観点から絹が日仏関係に与えた影響、地方創生という観点から産業遺産を観光資源として生かす方策についてフランスの取り組みを紹介しました。同シンポジウムはフランス主要テレビ局「フランス3」で、5夜連続の25分間のドキュメンタリー番組として放送され大きな反響を呼びました。



シンポジウムには約30名のフランス人が参加

(2) 映画で「伝える」日仏交流史（平成29年11月14日）

リヨン市はシネマトグラフを発明した映画の父と呼ばれるリュミエール兄弟の故郷です。人類における映画の歴史は、リヨン市で撮影されたわずか50秒の「工場の出口」という無声映画から始まります。12月2日から、富岡市が制作した映画『紅い樺“富岡製糸場物語”』が全国上映されるのに先立ち、リヨン市関係者や自治体首長を対象とした上映会を在リヨン領事事務所の多目的ホールで開催しました。映画通・映画狂をフランス語でシネフィルと言いますが、より多くのシネフィルに日仏交流の歴史を知っていただきたいと思います。



(3) 「乾杯！」はセルドンワインで（平成29年11月27日）

セルドン市では、富岡製糸場操業時に繭から生糸を繰り出す際に使用する銅鍋を製造していました。1世紀半の時を経て両都市の交流を再構築するために、同市のロゼワイン農家が発起して、「Soyeux Destins」（絹が結ぶ縁）という名のワインが誕生しました（日本では富岡市でのみ購入可能）。富岡市とセルドン市の交流をフランス国内の多くの方々にも知ってもらうために、「平成29年度天皇誕生日祝賀レセプション」では、乾杯に「Soyeux Destins」のラベルが付いたセルドンワインを用いました。

